

情報・資料・文献の探し方を教える

遠山 潤

On teaching methods for the search of information, materials and documents

Jun TOHYAMA

【概要】 本稿は、筆者がこれまで担当してきた科目群の中から情報・資料・文献の探し方に関わるものを取り出し、それらの授業で使用した資料を紹介する。そして、本格的なインターネット時代を迎えて、紙媒体の図書資料で前提とされていた資料の階層的な体系が崩壊し、その代替物として情報の統合的把握を可能にするための新たな関係性と対象性の創出が必要になっていることを指摘する。そして、文字の実体化、語彙の構造化、資料の組織化、主題と資料の関係が今後の課題であることを示す。

【キーワード】 情報教育、情報検索、文献調査法、文字情報、シソーラス、資料組織化

はじめに

数多く刊行されている社会調査のテキスト類を見ると、文献や資料についての調査は予備調査として位置づけられることが多い。その重要性を説かれることはあっても、必ずしも社会調査自体との関係が本質的に問われるというわけではなく、あくまでも「予備」的に位置づけられることが一般的である。これに対し、久留米大学の文学部情報社会学科では、2002年度に学科が創設されて以来、学科の専門科目として情報や資料、そして文献の探索法をカリキュラムの中に位置づけることで、社会調査の中における文献調査の意義を重要視する姿勢をとってきた。

筆者は、現在本学の図書館司書課程で「図書館情報論」「資料組織論」「専門資料論」などの科目を担当しながら、図書館司書課程科目の中の選択科目であり情報社会学科の専門教育科目でもある「情報検索」「社会情報調査論」や、専門教育科目の「文献調査法」を担当してきた。また、「教養演習」「総合情報社会論」「情報社会実習演習」「演習」といった学科に共通の科目も担当している。これらの科目群を全体として通して眺めてみることにより、図書館司書課程という立場だけで見ている時とは違って広い視点を得てみたい。今回の論考の意図はそのようなところにある。

本稿は、まず自分がこれまで担当してきた科目群の中から情報・資料・文献の探し方に関わる箇所を取り出して、それらの授業で使用した資料を紹介する。そして、本格的なインターネット時代を迎えて、伝統的な紙媒体の図書資料を使った調査方法では自明の前提とされていた資料の階層的な関係性が曖昧になってきた点を踏まえて、その代替物として情報の統合的把握を可能にするための新たな関係性と対象性の創出が必要になっていることを指摘する。そして、これらの現代的な課題を考察することにより、今後の本学科における情報と資料と文献の調査法に関する教育のカリキュラム化を図ろうとするものである。

1. 情報・資料・文献

最初に、タイトルに列記した情報と資料と文献という用語について整理しておく。そして、情報・資料・文献の3つの用語について、本稿で使用する際の意味範囲を規定しておきたい。もっとも手近な辞書である『広辞苑』を引いてみると、次のとおりである。

情報：判断を下したり行動を起こしたりするために必要な、種々の媒体を介しての知識

資料：もとなる材料。特に、研究・判断などの基礎とする材料

文献：筆録または印刷されたもの。文書

これらの説明を一般的な理解とすると、情報とは、人間にとってなんらかの意味のある内容を指すが、「種々の媒体を介して」とあるように、その中にはコンピュータによって処理される状態にあるものと、固定化された定形的な媒体に定着された状態のものが含まれることになる。また、資料とは、そうした情報の物理的担い手としての媒体を不可欠の要素としており、「材料」という表現は図書・雑誌・ビデオ・DVDなど内容が収納され固定的に定着された物理的容器を前提としていることが考えられる。ただし、ネットワーク上に展開される情報資源に対して明確に排他的とも言えない。さらに、文献とは、主として文字が紙またはこれに準ずるものに記録された記録物を指している。

つまり、情報は人間にとって意味のある内容であり、資料にはその情報を目や耳などの感覚で受け取れる形に置き換えている物質が必要であり、文献はとくに紙の資料に文字が記載されているものであるということになる。

一方図書館の『日本目録規則 1987年版 改訂三版』を見ると、電子資料は

コンピュータ（その周辺装置を含む）によって利用可能となるデータ、プログラム、または両者の組み合わせ

と定義されている。一定の形状を維持する「物」としての実体をもたなくても内容そのものを資料として明確に規定している。つまり、図書館情報学では、一般的な意味での情報を指して資料と呼ぶことがある。本稿では、資料をこの意味で用いる。

2. 関連科目

まず、本稿で言及する科目を列挙してみる。そして、その中からとくに「教養演習」「情報検索」「社会情報調査論」「文献調査法」についてやや詳しく説明する。

区分	科目名（開講年次）	備考（開始年度）
教養科目	教養演習（1）	履修必修（1999）
専門教育科目	情報検索(1)	履修必修（図書館司書課程の選択）（2001）
	社会情報調査論（1）	選択（図書館司書課程の選択）（2003）
	文献調査法（1）	選択（2003）
	総合情報社会論（1）	履修必修（2002）
	情報社会実習演習（2）	履修必修（2003）
	演習（3・4）	履修必修（1999）
図書館司書課程	専門資料論（1）	必修（2005）
	資料組織論（2）	必修（1999）

2. 1 教養演習

「教養演習」は、入学直後に学籍番号によりクラス分けされた1年生のゼミである。学生数を教員数の1/2で割った人数（15～20名）を前期・後期と担当者が交代して担当している。学内の講義要項である『学修ガイドブック』に載せた講義の目的と概要は、「印刷資料と電子資料の違いを体験し、インターネットの優れた点と不十分な点を理解する。レファレンス・ツールを単独ではなく、複数のつながりとして把握する」というものである。

方法は、図書館内の図書資料を使ったあるテーマに関する調査を1週間の宿題として課した後、次週の授業ではコンピュータ教室を使い同様のテーマをインターネットで検索させた。学生は授業後両方の作業結果を提出するが、その時それぞれ手書きで作業後の所感を付けて出し、その翌週授業担当者がそれに対するコメントを付けて返却した。課題の出し方としては、何について調べるかは学生の自由だが、使用資料と探し方の手順は細かく指定するという形をとった。

例えば、人物調査の場合、誰について調べるかは自由だが『人物レファレンス事典』から入って個別の人名事典を見つけ、目的とする人物についての記述内容を転記するという枠組みを決めて行なった。この方法は、自分で好きな事を調べられるという楽しさはあるが、明確な答えが出て他の人と比べられるという面白さに欠けるのが難点である。

この演習でのねらいどころは2つある。

- a. 印刷資料と電子資料というメディアの違いを認識させること
- b. 資料のつながりを認識させること

2001年度の教養演習で実施した資料区分・図書資料・関連サイトは次のとおりである（2003年度以降は、内容をレポート作成法に変更）。それぞれ、資料区分名：『図書資料の書名』（関連サイト名）という形式で記載している。

- ・人名事典：『人物レファレンス事典』（Yahoo! JAPAN, key person）
- ・地域百科事典：『福岡県百科事典』等の地域別・県別百科事典『全国市町村要覧』『角川日本地名大辞典』（Map Fan Web, Mapion, 地域発見, Yahoo! JAPAN, 路線情報, 駅前探検倶楽部, やど上手, JRサイバーステーション）
- ・歴史便覧：『日本史総覧』『読史総覧』『読史備要』（Yahoo! JAPAN）
- ・語句索引：『新編国歌大観』
- ・類語辞典：『角川類語新辞典』（シソーラス辞書）
- ・販売書誌：『出版年鑑』『日本書籍総目録』『Book Page 本の年鑑』（books.or.jp, TRC, 紀伊国屋, eSBooks, 田舎の本屋さん, BOOK TOWN神田, 日本の古本屋, インターネット古書店案内）
- ・翻訳書誌：『翻訳図書目録』"Books in Print"（Webopac, Webcat, 久留米大学御井図書館OPAC, 大英図書館, 米国議会図書館）
- ・雑誌記事索引：『雑誌記事索引累積索引版』『東洋学文献類目』（Japan Press Index, Mainichi INTERACTIVE, 佐賀新聞）
- ・書誌の書誌：『書誌年鑑』（実践女子大学図書館図書・雑誌探索ページ, アリアドネ）
- ・歴史事典：『国史大辞典』（Yahoo! JAPAN, goo, infoseek, Lycos, excite）
- ・国語辞典：『日本国語大辞典』（Yahoo! JAPAN, goo, infoseek, Lycos, excite）
- ・総合目録：『国書総目録』『古典籍総合目録』
- ・専門事典：『日本近代文学大事典』（青空文庫）
- ・美術全集：各種の美術全集（Famous Paintings exhibition, エルミタージュ美術館, 東京

国立博物館，私の好きな絵)

・百科事典：『ブリタニカ国際大百科事典』（Britannica.com）

インターネット情報源と上記丸括弧内のサイト名を2007年の現在と比べてみるとかなりの食い違いが見つかる。今では国語辞典を初めとして辞書類はYahoo!JAPANやgooに数多く入っているし、日本古典籍総合目録データベースも使える。歴史事典や専門事典としてはWikipediaの存在を無視できない。検索エンジンの名前にも5年前の時代を感じさせるものが含まれている。

2001年当時には『日本書籍総目録』は冊子体でまだ刊行されていたし、雑誌記事索引はまだ無料でインターネット検索できなかった。Googleも2000年9月に日本語対応の検索サービスを開始してはいたが、まだ今日のような大きな存在になるとは予測できなかった。

上記リストは実際の授業の順序に従い並べられている。第1回を『人物レファレンス事典』から始めたのは、人間への関心から始めるのがいちばん入りやすいだろうという理由からである。学生には毎回意見を書かせた。その内容は、インターネットは早くて便利であるというものから、冊子体資料の方が情報が整理されていて使いやすいというものでさまざま、容易に集計したい。回答用紙に今回もう一度目を通して見て、全体的に受け取った印象をあえて集約すれば

・調べるために作られた図書というものをはじめて利用し、その便利さに驚いていた。

・インターネット情報源が当時（2001年）は現在よりも新鮮に映っていた。

といったところである⁴⁾。

2. 2 情報検索

「情報検索」は1年次の前期科目で選択必修であるが履修指導により実質的には必修科目になっている。また、図書館司書課程の中の選択科目でもある。『学修ガイドブック』に載せた講義の目的と概要は、「インターネット上の情報資源を自分で検索し活用するための基礎知識と、学生生活に必要なWebページを知り、その利用方法を習得する」ことである。この授業は、コンピュータ教室を使い、1人1台のPCを前に演習形式でおこなう。2006年度の授業内容（キーワード）を13回分順を追って以下に示す。

- ①インターネットと現在の生活（地図、時刻表、予約、天気予報）、その歴史と仕組の関係、自分の名前による検索（ENIAC, ARPANET, パケット, ルーター）
- ②ハードウェアの名称、ブラウザソフトの使い方、画面各部の名称と機能、2画面によるリンクの連続表示（5大装置, LAN, クライアントとサーバー, ブラウザ, URL, アドレス, ドラッグ・アンド・ドロップ, ソースファイル）
- ③WWWの基本技術、メモ帳によるHTML文の作成、ブラウザによる解釈とリンクの体感（WWW, HTML, HTML文, ファイル名, 拡張子, ハイパーテキスト, ハイパーリンク）
- ④WWWの基本技術（URL, HTTP, ドメイン名, パス, フォルダ, ディレクトリ, ドライブ名, OS）
- ⑤webページの整理と格納、これまでの用語整理（ホームページとWebページ, WebサイトとWebサーバー, サイト・マップ, ファイル, テキストファイル）
- ⑥検索エンジン（リンク集, ポータルサイト, 検索エンジン, ディレクトリ型検索エンジン, ロボット型検索エンジン, カテゴリ, カテゴリ検索, サイト検索, ページ検索）
- ⑦Yahoo!による検索（論理演算, 論理和, 論理積, 論理差, フレーズ検索, 共出現, 検索語の分割）
- ⑧Googleによる検索：検索は名前の一致, 検索語の選択とみ合わせ（ページランキング, イ

メージ検索)

- ⑨7つの「検索」：Googleで検索可能なものと不可のもの（リンク集，カテゴリ検索，サイト検索，ページ検索，サイト内検索，ページ内検索，データベース検索）
- ⑩デジタル情報，検索，複製，移動，劣化，著作権，文字列の一致（アナログ，デジタル，劣化，イメージ，文字，符号化，文字コード，排他性，キャラクタ）
- ⑪日本語情報：旧字体と新字体，同音連呼，連濁，送りがな，外来語，（日本語表記の「ゆれ」）
- ⑫目録情報：データ>情報>知識 情報>文字情報>日本語情報>書誌情報>目録情報，Webcat，NDL-OPAC（図書目録，国立国会図書館，国立情報学研究所）
- ⑬統計情報・大学図書館の「情報の探し方」・まとめ・e-メールの使い方：情報>数値情報>統計情報，ブラウザを使ったWebメールの方法，礼儀（cc，bcc，添付）

「情報検索」は毎回プリントによる課題を手書きで提出させ，授業時間内に終わらなかった学生は次週までに研究室まで持参するように指示した。「インターネット上の情報資源を自分で検索し活用するための基礎知識」として，インターネットがどのようにして生まれ，またどのような仕組みで検索という行為が可能となっているのかについて図示したり最小限の用語で説明している。検索中に自分がいま何をやっているのかを①～⑬のキーワードを使って他の人に説明できるようになることが目標である。

だが，①の中でインターネット上の地図，時刻表，宿泊情報，天気予報といった生活情報を検索したり，自分の名前で検索をかけ同姓同名異人や自分自身を発見したりするときにと比べて，そうした仕組みの説明にあまり関心をもたない学生は多い。学部共通の授業評価アンケート（2006年度）でも，この科目は理解しやすさのポイントが筆者の担当科目中もっとも低かった。自由記入欄に「初めの頃の授業内容は目に見えないことを勉強していて，上手くイメージできずに理解するのがとても難しかった」という感想を書いた学生がいた。こうした点に問題が集約されるだろう。この授業が1年生前期の履修必修であることを考えると，「学生生活に必要なWebページを知り，その利用方法を習得する」という実用的な利用価値を授業の中でまず先に充分体感させ，説明はその検索行為の後に種明かしの付するような仕掛けを工夫する必要があるようだ。

2007年度からは，社会調査との関係を考慮して⑫の書誌情報と⑬の統計情報についてそれぞれ2・3回ずつ事例を豊富にして演習を繰り返し実施する。そして，②～⑤の説明は演習内容を適宜解説する形で授業の後半に取り込む予定である。

2.3 社会情報調査論

「社会情報調査論」は1年生後期に開講され，学科の専門教育科目（選択）であり，また図書館司書課程科目（選択）でもある。図書館を使った調査は，大きく文献調査（必要とする情報を直接入手することは出来ないがその情報が掲載されている資料の存在を教えてくれる案内指示的なレファレンスツールを使用）と事実調査（必要とする情報が直接入手できる事実解說的なレファレンスツールを使用）に分けることができる。ここでは，調べる対象・目的毎に事実調査用資料について「凡例」を読み，資料の活用法を習得することを授業の目標に置く。2006年度の資料区分と使用資料（『内は代表的な図書の書名）は次のとおりである。

- ・漢和字典：『大漢和辞典』
- ・国語辞典：『日本国語大辞典』
- ・類語辞典：『類語新辞典』
- ・語句索引：『聖書語句大辞典』

- ・ 百科事典：『ブリタニカ国際大百科事典』
- ・ 統計情報：総務省サイト『日本統計年鑑』『統計情報インデックス』
- ・ 歴史事典：『国史大辞典』
- ・ 歴史年表：『日本文化総合年表』『日本近代総合年表』

一見して分ることだが、事実調査用の資料はインターネット情報源をほとんど使用しなくても授業が成立する。この点が文献調査用のツールと大きく違っているところである。ただ、紙媒体のばあい課題を与えて演習させるとなると、図書館にある1点（セット）の図書資料を1週間の間に60名くらいの学生が一斉に利用することになる。ときには、前に利用した学生が元の書架上に戻してないという事態も発生して、なかなか全員均等に調べるための機会が与えにくいという問題もある。だが、図書館が所蔵する図書資料は、執筆者や編集担当者、出版社の責任が明確であり信頼性の高いものが多い。学生は「凡例」についての意識をほとんどもたないのので、『日本国語大辞典』のような本格的なレファレンスブックの「凡例」を読むことでその奥行きを感じ取り、インターネット情報源との差異を弁えた上で、使い分けができるようなセンスを養いたい。

2. 4 文献調査法

「文献調査法」は1年生後期に開講され、学科の選択科目である。『学修ガイドブック』に載せた講義の目的は「自分で論文を書くために必要と思われる図書及び雑誌論文についての基本的な調査法を習得する。探し出した資料のリストの作成方法を習得する」というものであり、最後に文献リストの書式とリストアップをおこなう。図書館資料を使った調査の中で文献調査を取り扱うという意味で、事実調査を守備範囲とする「社会情報調査論」とは対をなすものである。

2006年度の資料区分と使用資料（『』内は図書の書名、丸括弧内はサイトまたはデータベース名）は次のとおりである。

- ・ 図書の販売書誌：『出版年鑑』『本の年鑑 Book Page』（amazon.co.jp, bk1, Books.or.jp）
- ・ 図書の蔵書目録：（NDL-OPAC）
- ・ 図書の総合目録：（Webcat）
- ・ 図書の目次から検索できる目録：『全集作品名総覧』等の叢書合集索引類、（東京大学附属図書館ブックコンテンツ 東京都立図書館蔵書目録、国立情報学研究所 Webcat Plus）
- ・ 雑誌の販売書誌と目録：『雑誌・新聞総かたろぐ』（NDL-OPAC の和雑誌新聞、Webcat の雑誌検索）
- ・ 雑誌の総目次・総索引：『日本雑誌総目次要覧』『日本雑誌総目次要覧84/93』（NDL-OPAC の（雑誌記事索引）
- ・ 雑誌記事索引：『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』（NDL-OPACの雑誌記事索引）
- ・ 書誌の書誌：『書誌年鑑』

前節で述べたように「社会情報調査論」は図書館内にある紙媒体の冊子体資料いわゆる図書に多くを依存しているわけだが、「文献調査法」になるとインターネット検索をほぼ主体として使用資料が組み立てられる。事実調査に比べて文献調査は電子化されたデータベース情報源への依存度が高いからである。とくに、amazon.co.jp,bk1,Books.or.jp といった販売書誌や、NDL-OPAC, Webcat, Webcat Plus を含む OPAC（図書館目録）に関しては、現在ではインターネット上の情報源に代わる代替資料が存在しないという状況になっている。

この科目は、論文を書くということを前提にした説明の仕方が1年生にはまだ理解しづらいという反省を踏まえて、2007年度以降は3年次開講とすることになった。

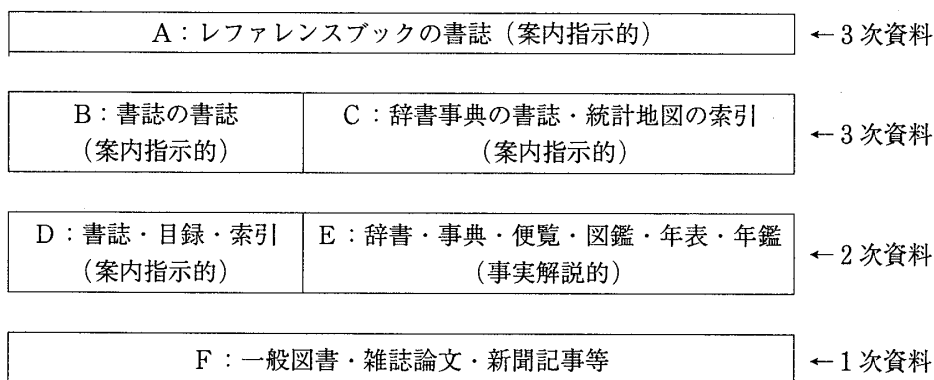
3. 調査用資料の体系

図書館の調査用資料を体系的に説明するとき、もっとも一般的な方法は次の図のようなものである。すなわち、資料のオリジナリティを上下の軸にして1次・2次・3次と分けることで、原資料が一番下になり、上へ行くほど加工の度合いが高くなる。また、原資料に含まれる情報を直接的に取得出来る事実解說的な2次資料か、あるいは間接的な案内指示的2・3次資料かで横に区分するものである。なお、1次・2次・3次については次のように定義される。

1次資料：それ自身で完結したオリジナルな情報を収録している資料

2次資料：1次資料を何らかの形で加工、再編成した資料

3次資料：2次資料を何らかの形で加工、再編成した資料



上図に基づいて説明すれば、2次資料は案内指示的と事実解說的と両方あるが、3次資料はすべて案内指示的である。つまり、最終的に必要とする情報を直接取得できずその情報が載っている資料の存在を示す案内指示的な資料の中には、2次資料と3次資料が含まれるが、直接情報を取得できる事実解說的な資料は、すべて2次資料である。上図の中から1次資料をのぞいた図書資料を図書館ではレファレンスブックと呼んでいる。

前章で紹介した資料の中から印刷物の冊子体資料だけを選び、上図の調査用資料の体系中のどのタイプをどのくらい使ったかを「教養演習」「社会情報調査論」「文献調査法」の3科目について数えてみた。その結果は以下のとおりである（タイプ名は記号化している）。なお、「A：レファレンスブックの書誌」は具体的には『日本の参考図書』を指している。この資料はどの授業でも取り上げられていないように見えるが、実際は3つの授業とも最後の方で扱っているのだが、紹介しただけなので数えてはいない。

	A	B	C	D	E	F
教養演習		1	1	10	10	1
社会情報調査論			1		9	
文献調査法		1		6		

この結果を見ると、「社会情報調査論」は事実解說的2次資料、「文献調査法」は案内指示的2次資料が中心であり、「教養演習」は両者を混合させたものであることがわかる。「教養演習」に関しては、この科目が1年生の履修必修であり、またクラス分けは学籍番号で機械的になされるものであるため、資料を浅く広く選んでいる。「印刷資料と電子資料というメディアの違いを認識させること」と「資料のつながりを認識させること」という目標に対して、まずは導入の役割を果たす意味合いからである。

3. 1 「体系」の崩壊

これまで述べてきた「調査用資料の体系」は、縦軸がオリジナルなものを編集加工した度合いでオリジナリティからの距離を表し、横軸が情報そのものの直接的取得が可能か否かという違いを示していた。これは図書館情報学教育及び司書課程科目において基本的な概念図である。

この「体系」が成り立つには一つの前提がある。それは、調査用資料の世界には情報へのアクセス性において1次的なもの・2次的なもの・3次的なものという截然とした識別可能な区別があり、同時に情報それ自体を伝える2次資料と情報の存在と所在箇所のみを伝える2次資料という区別もあり、これらの区別はいったん資料が誕生した後は固定的かつ不変であるというものである。

こうした前提を基に、前章で紹介済みの「教養演習」「情報検索」「社会情報調査論」「文献調査法」で使用したインターネット資料について、調査用資料の体系の中のA~Fの資料タイプのどれに入るか試みに分類してみる。すると、印刷資料の調査用資料を念頭に置いて作られた区分原理をほんらい異質な被区分体に適用させることで、破綻してしまうことがわかる。

すでに紹介したサイトをいくつか取り上げて「体系」の中に分類してみると、例えばインターネットという世界への窓口としてよく利用されるYahoo! JAPANやGoogleは1次資料・2次資料・3次資料すべてを案内するタイプAのイメージに近い。ただ、書誌データベースや辞書事典への入口でもあるのでB・Cの機能も備えている。Yahoo! JAPANのディレクトリを使った入力語を使わない検索を行っているときは、案内指示的ツールとして利用していると言えそうだが、高性能なキーワード検索で知られるロボット型のGoogleは情報への直接アクセスを可能にする事実解說的2次資料すなわちタイプEとして使われているとも考えられる。

また、アリアドネは人文系のタイプA、図書雑誌探索ページ（実践女子大学図書館）はリンク先が図書・雑誌・新聞なのでタイプBに近いが、いずれも情報の存在を示すと共に情報の直接的な取得の入口ともなっている。これに対し、books.or.jp（新刊書販売書誌）・日本の古本屋（古本販売書誌）・Webcat（総合目録）・NDL-OPACについては、図書資料のタイプDをほぼそのまま引き継いだ形を保っている。

事実解說的ツールとしては、路線情報（時刻表）・Mapion（地図）・やど上手（ガイドブック）・JRサイバーステーション・シソーラス辞書などがあり、これらはタイプEに入る。佐賀新聞（新聞）、総務省、青空文庫といったサイトについては、新聞記事・統計データ・一般図書の1次資料なのでタイプFに入れることができるだろう。

以上の全サイトに関して言えることとして、

- ① 2次資料・3次資料的なものもすべて1次資料へ直結する回路を併せ持っていて、それは拡大する傾向にある。

（例：図書館目録に目次情報が追加され、雑誌記事の全文が閲覧可能になってきている）

- ② 資料であると共に検索者側の合目的な行為のための手段としての機能を持つ。

（例：問い合わせ、予約申し込み、支払い）

紙媒体の印刷資料にとってこれまで自明であった「体系」の客体性は、インターネット上の情報源にとっては、その動的で双方向的な性質のため流動化し、相対的な意味合いしか持たなくなっている。つまり、従来の「体系」の中の区分に容易に納めることが出来ない。「体系」にとっての基盤は崩壊しているのである。

その要因としてまず挙げておくべきは、リンクの存在である。インターネットを支える技術要素の中でリンクは資料調査・情報検索の分野にとって決定的な意味を持っている。あらゆる

Web ページをあらゆる Web ページに対して自在に連結できるこの機能の登場により、1次資料・2次資料・3次資料が階層構造的かつ静態的に存在するという前提は崩れてしまった。リンクが「体系」を無効化したのである。

すべての資料は関連がある（と思われる）他のすべての資料とリンクによる1対1の連結関係を持つことで、いかなる順序性や系統樹をも持ちうるし、どのような全体の配置図でも描きうる。こうして、情報の入口と出口はいつでも交換可能になり、いかようにでも変更可能になる。これは、あらゆる情報が人間にとっての固定した距離感というものを無くして浮遊しながら全地球的な規模で肥大化しているという図柄である。現代哲学用語で言うところの、ツリー（樹木）状すなわち階層構造的ではなくリゾーム（根茎）状（それぞれ異質なものが異質なものと接合されながら、始まりもなく終わりもなく、多方向にまた重層的に錯綜しながら伸びていく存在モデル）を具現していると言えよう。

すでに確かめたように、調べるために作られた調査用の図書の中で事実解説的なものはかなり健在のまま生き残っている。これらのタイプの調査用図書は、今後も小説やエッセイ・論文といった一般の読み通すために作られた書籍とともに紙媒体の冊子体印刷資料として少なくとも当分の間は生き残ることが予想される。しかし、インターネットの進化もこれから止むことがないだろう。こうしたハイブリッド（混合）な環境を前提として情報・資料・文献の調査を考える際には、全体像を鳥瞰する姿勢も必要だが、とくに電子化された資料の調査を進めるための方法がこれまで以上に整備される必要があるだろう。

3. 2 今後の課題

1999年度から始めた「教養演習」のねらいは「印刷資料と電子資料の違いを体験し、インターネットの優れた点と不十分な点を理解する。レファレンス・ツールを単独ではなく、複数のつながりとして把握する」というものだった。このねらいは、今回紹介した授業科目全体に共通する大きな目標でもある。そのために、「はじめに」で述べたような「情報の統合的把握を可能にするための新たな関係性と対象性の創出」が今必要とされている。ここでは、これまでの授業から得られた経験を基に、文字の実体化、語彙の構造化、資料の組織化、主題と資料の相関の4点を軸に、今後の課題について考察してみたい。

第1に、ネットワーク上の情報資源に接する際には、可視的な実体概念としては文字という実体しかないという点について理解させる必要がある。文字を含むキャラクタを実体として捉えることになるが、これは「情報検索」「総合情報社会論」で扱っている。例えば、「情報検索」ではGoogleでキーワードからのイメージ検索を行い、その検索が文字と画像を直接つなぐものではなく画像が埋め込まれたページにそのキーワードがある場合に検索が可能となり、表示の際に画像だけを出す仕組みであることを説明し、基本的には文字列の一致が情報検索の実質であることを理解させている。

また、文字コードにも言及し、すべての文字が排他的であることが文字による表現を支えている、その点が画像情報と異なるということにふれる。キャラクタの中に数字・記号そしてスペースが含まれていて、このスペースの存在が英語のword by word（語順）という排列性を支えている点も解説する。

「総合情報社会論」は学科の専任教員が1人2コマずつリレーで授業をおこなう科目である。その中では「本のかたち」と題して、紙で出来た四角い冊子体という形象を持たない本について講義した。具体的には、CD-ROM版新潮文庫とインターネット上の「青空文庫」について紹介

し、これらを伝統的な本と比較することにより、電子化された資料の対象性は文字それ自体によってのみ支えられていてそれ以外の形象を持たないことを説明した。

第2に、語彙を構造化する方法として意味の関係性に注目する。これはシソーラスと呼ばれ、言葉を意味的な類縁性をもとに整理し体系化した語彙表のことで、語義の説明が付いた辞典形式のものもある。西洋ではロジェのシソーラス以来長い伝統がある。「教養演習」「社会情報調査論」で使用した『角川類語新辞典』がそれに当たる。作業の方法としては、各自が自分の好みで自由に選んだ語彙について『角川類語新辞典』を使って調べ、その語彙が所属する大分類、中分類、小分類を記し、類義語と対義語を近隣の語彙から自分で選んで記すというものである。

素朴な方法だが、こうした「辞書」の存在を知らない学生がほとんどであり、2006年度は提出物の「質問その他」の欄にその便利さについて意見や感想を書いた人が60名中半数程度いた。この手の課題では何か意見を書く人は数名程度が通常なので反応は良いと言えるだろう。回答を採点し返却し解説をおこなう。その際に、まず、レポートや論文を書くときの必携のツールとして紹介する。日本人には語句索引を使って古典を引用したり、シソーラスを活用して文章を書く習慣のある人が少ない。だから、自分の語彙を増やすための道具があるということを知らせるのが一つのねらいであるが、そこから発展して検索用のシソーラスは本格的な文献情報データベースの活用には欠かせないものであり、統制語という概念を混ぜながら説明する。

第3に、資料の組織化についてである。資料の組織化は目録と分類が中心となっている分野で、その成果物がOPAC（オンライン図書館利用者用目録）である。OPACの利用法については、「教養演習」「情報検索」で演習を行い、「文献調査法」では課題を解く過程でOPACの利用が必要になる。代表例として、NDL-OPAC（国立国会図書館）・Webcat（国立情報学研究所）・久留米大学御井図書館OPACを使用する。説明の際には、NDL-OPACやWebcatは資料の所蔵館を確認するための目録として作られているが、そのレコード数の圧倒的な多さのため実際にはどんな資料がこの世の中にあるのかという存在情報を調べるために使えることを教える。そして、存在そのものが確認された後、自分が在籍する大学図書館のOPACを使って所蔵を確かめていくという方法を課題を通じて理解させる。存在情報と所在情報との違いを認識させ、その調査順序の意味がわかるようになることがねらいである。

OPACの利用実態はOPACの制作者側の意図に反し、概して貧寒である。利用者の大多数は目録の機能、書誌的な知識を持っていないし、書名や著者名などの既知事項検索と主題検索の区別も意識しないことが多い²⁾。

近年インターネットの検索エンジンも淘汰されGoogleの台頭がいちじるしい。そうした状況の中で、現在の大学生の探索行動も変化している。例えば、2006年度の「教養演習」の受講生（1年生）の中でもっとも一般的な行動パターンは、自分の調査活動をWikipediaと「はてなダイアリー」から始めるというものだった。彼らは、何かについて調べるときに、書名と主題の識別はもちろん、図書とインターネット情報源の区別もあまり意識していないように思われる。実際に、とりあえず確かめるのにWikipediaほど便利なものはあまりないというのが現状であるので、学生たちには1次接近としてのWikipediaの利用価値を認めた上で、その成り立ちと実情について説明し、2次接近としてより信憑性のある情報を図書や雑誌等の印刷媒体から得る方法を指導している。これは、資料のタイプを見分けつつ目的に応じて判断し使い分けることが出来るようになるということが目的であるが、同時に1次と2次という順序性を設けることで資料の空間的なイメージを形成しようとしている。

情報の加工による1次資料と2次資料の違いを理解させる方法としては、統計情報が便利で使

える。「社会情報調査論」で統計資料を扱う際に、1次統計・2次統計の違いを述べた上で、通常は2次統計がよく利用されるということを説明する。そして、統計データを使って論文を書くときの注意事項として、論文を読んだ人がその論文中に使用された統計情報を基に1次統計まで遡れるよう典拠を明示する必要があるということを説明する。これも資料の世界を空間的イメージで捉えさせようとする試みの一つである。

書誌情報の解説については図書館司書課程科目「資料組織論」で詳細に扱われるが、書名・著者名・出版社・分類・件名といった目録の内容を読み取る書誌的読解力については司書資格とは関係なく広く教えていく必要があると考えている。

第4に、主題と資料の関係である。情報を構造化し組織化するにあたっては、知識そのものに関する何らかの理解が前提となる。それは、先ほどの「体系」の中で言えば、1次資料の系統的な理解ということになる。「専門資料論」では、人文科学・社会科学・自然科学・工学の各領域ごとに知識特性を述べ、それに見合う形で資料の特性があることを解説している。意識とはもともと何かについての意識であるように、資料とは何かについての資料である。そのため、資料調査・文献調査について本格的に取り組もうと思えば、主題の問題は切り離すことが出来ない。これについて扱う授業は「専門資料論」だけであるが、この科目は情報社会学科の専門科目ではなく図書館司書課程の必修科目である。書誌情報の読解力と同様に、主題特性と資料特性との相関も、司書資格とは関係なく広く知っておくべきなので、具体的に学科の専門教育科目（選択）にも取り込むことを2007年度中に検討したい。

これまで4つに分けて今後の課題となる項目を述べた。最後に「演習」及び「卒業論文」について述べる。

3年生のゼミでは、2006年度からテーマは比較的自由に選び、そのテーマについての文献収集を行い、収集した文献の中でもっともテーマに適合した雑誌論文を20点読み、その要旨を作り、各文献に対して3～5のキーワードを付与し、そのキーワードを総合して意味の広義語・狭義語関係、関連語関係を見つけ出す作業を試みている。そして、自己の設定したテーマの領域におけるシソーラスを作るまでの一連の作業を課題として課している。

こうした作業をとおして、国立国会図書館の蔵書目録データベース（NDL-OPAC）を始めとして図書館資料とその目録情報に付与された件名（NDLSH）や分類（NDLC、NDC）がいかに粗く大づかみな主題把握しかできてないかが理解でき、さまざまな主題研究に必要な文献調査用検索キーとしてどの程度の主題語の精粗が求められるのかという問題について考えさせることと、キーワードの概念的な深さについてのセンスを磨くことができる。まだ開始したばかりであるが、これがいまのところ情報社会学科の専門科目における情報・資料・文献の探し方についての教育の最終段階で実践している方法である。

おわりに

今回の論考のまとめとして、次の3点を確認しておきたい。

まず、本稿は「はじめに」で掲げた「情報と資料と文献の調査法に関する教育のカリキュラム化」という課題に対して、問題解決の方向を示すべく今後の課題とすべき項目を列挙したが、未だ解決にいたる方法は提示し得ていない。この分野における「何を（スコープ）、何年次（シークエンス）で教えるか」というカリキュラムが理論的にも実践的にもあきらかにされていない⁹⁾という現状を踏まえながら、実践を通して成果を出しつつ、理論的な問題にも踏み込んでみたい。

次に、情報と資料と文献という3つの用語については、本文中で語義にふれたものの、どれかを代表させて使用するということはせず、文脈に応じて使い分けるというやり方をとった。これは、目録規則において「コンピュータファイル」と呼ばれていた資料が規則の改訂に伴い「電子資料」へ変更されたことからわかるように、図書館情報学においてこれらに関連する用語がいまだ安定していないためである⁽⁴⁾。

最後に、カリキュラム研究の基礎領域としてコンピュータ社会がもたらした人間の意識変化に関する研究が不可欠であるという点である。

「座ったままで」「指先でキーボードに触れながら」「ディスプレイを見ている」という姿勢は、探すという行為が人間にとって持つ意味を変化させている。つまり、資料という（主として）紙で造られた四角い物体を広い図書館の中で歩きながら探し求めるという行為と、コンピュータの前に静止した状態で肉眼では直接不可視の情報を画面を見ながら検索するという行為とは、何かを探すと同一の目的を持っていながら「どこかに」「なにかが」「ある」という人間の空間意識においては全く異なった前提でなされる。

これからは、その双方のもつ特性を理解した上で目的に応じて臨機応変に使い分けられる能力が求められることは間違いがないのだが、ネットワーク型の情報源から人間の思惟の素材となる感覚的認識は深く影響を受けている。一言で言えば人間の身体が保持している「比例感」の変容として捉えられるはずである⁽⁵⁾。この問題は今後、より本質的で深刻な課題を提供するだろう。

注

- (1) 遠山 潤 事例発表：情報リテラシー教育をどう設置するか『平成12年度第86回 全国図書館大会記録・沖縄』pp258-259
- (2) 上田修一 WWW上のOPACにおける既知事項検索の諸問題『Library and Information Science』No.41 1999 pp1-15
- (3) 安藤友張 大学における初年次教育と図書館スキル・情報リテラシーの育成－現状と課題－『図書館雑誌』Vol.100 No.10 (2006.10) 689p
- (4) 『日本目録規則 1987年版 改訂版』（日本図書館協会 1994）の第9章の章題は「コンピュータファイル」だったが、『日本目録規則 1987年版 改訂二版』（日本図書館協会 2001）の第9章は「電子資料」と変えられた。現在『日本目録規則 1987年版 改訂三版』（日本図書館協会 2006）が出ていて、第9章「電子資料」である。
- (5) 遠山 潤 デジタル情報資源の空間概念『久留米大学文学部紀要 人間科学編』第19号 (2002.3.31)

付記 本研究は、平成16～18年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））「社会調査士養成カリキュラム開発のための領域横断的実証研究」（研究代表 鈴木廣）による研究成果の一部である。